

## 〈脱成長〉時代の児童文学（第一回）

……「終焉」とその後をめぐる状況

佐藤 宗子

三回の評論連載にあたり、通し題目に「〈脱成長〉時代」という語を用いた。誤解を招かぬようにあらかじめ言えば、これは「児童文学」における「成長」とは関わりない。後述のようにラトウーシュの用語の訳に依っている。連載第一回に当たる本稿では、まずこの語とそれをめぐる考え方について説明をし、次に本稿執筆時点である二〇一四年の全体的な状況を概観し、さらに児童文学における状況を把握することをしていきたい。

1

〈脱成長〉とは、フランスの経済学者セルジュ・ラトウーシュの用語 *décroissance* の訳語である。ラトウーシュは『経済成長なき社会発展は可能か？—〈脱成長〉と〈ポスト開発〉の経済学』（作品社、二〇一〇）が初邦訳で、その後の訳書『〈脱成長〉は、世界を変えられるか？—贈与・幸福・自律の新たな社会へ』（同、一三）も大著だが、私が

触れたのはよりコンパクトなデイディエ・アルパジェスとの共著『脱成長「ダウンシフト」のとき—人間らしい時間をとりもどすために』（未来社、一四）である。実のところ訳者が縁者であることがきっかけだが、そこで示される考え方は、最近も政治家が示すような「二〇五〇年にも一億人維持」といった構想に疑問を抱く者としては共鳴しやすいただろう。

同書序章によれば、このキーワードはそもそもルーマニアの経済学者の仏訳により一九七九年に使われたそうだが、このスローガンによる運動の呼びかけは二〇〇二年まで下るといふ。具体的に言えば「自らの意思で節制を選択した社会」の出現を目指すわけで、「持続可能なエコロジカル・フットプリントの感覚をとりもどす」ことになる。

本書の原著はもともと若者向けの小冊子ということで、ところどころポイントがまとめられているので、いくつかを抜き出してみることで、端的にラトウーシュの考えを示